
第十八訓練生 零

椿山 昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第十八訓練生 零

【ZPDF】

Z0694D

【作者名】

椿山 昇

【あらすじ】

室蘭を舞台に製鉄所を守る部隊の話です。第十八部隊の二作目です。

「目標物との距離は約2,800m 気温20・3
風向き、北北西 風力2・0 湿度66%」
無線で目標物との、距離が教えられる

「嘘つけ、中谷！ 気温20、湿度66%だと？」
絶対に30、湿度は90%を超えてるね」

俺は、土や草などでカモフラージュされてるが、

中身は鉄とコンクリートで密閉された部屋の中にいた
「まあそういうなや竹中、室内と外では気温がなまら
違うんだよ」

「つたく、そつちはいいよな 外だし、何しろ一人じゃないしな
それに古いが日本製の武器だしな」

俺の横には、誰もいない あるのは
弾薬とモシン・ナガン（ライフル）と三式一〇〇mm高射砲（軽機関銃）があるだけだ

それに引き替え向こうは高台にいて外にも出てて
武器は室蘭にある数少ない、日本製の「三式一〇〇mm高射砲 改」
だった。

「ほら、そんなことははどうでもいいから、さつさと撃て

目標物は待つてはくれないぞ」

「はいはい・・・

俺はモシン・ナガンを目標物に標準をあわせ
引き金を引いた

目標物に弾が命中し、目標物はじけた。
すると、無線で

「よーしリンク消滅を確認 よかつたな、新記録だぞ、竹中
ハイ、訓練終了 今回も竹中の勝ちでござります」

俺は無線で中谷に

「おい、中谷忘れてないだろな？」

「はいはい、飯をおごればいいんだろ？」

「わかつてゐるじゃないか、ついでに興一の分もな」

「おいおい勘弁してよ・・なんで弟の分もおいらなきやいけないの
れ」

「こんな時期だし、金がないんだよ。頼むよ

「・・仕方ないな、早く学校に戻るべ」

「俺はカレーな、しかも、から揚げセツト」

俺と中谷は室蘭港防衛隊に所属していた。

しかし、防衛隊とは言つてもそんな建物があるわけでもなく
今は、室蘭の学校にお邪魔している感じになつていた。

学校に戻るとなにか、ざわついていた

すると先に学校に着いていた中谷達が

「おい、聞いたか竹中？　また中央の奴等が俺達の武器を取りにきたらしいぞ」

「またかよ、もう室蘭には、ほとんど日本製の武器はないぞ」

「俺達の高射砲は大丈夫だがそれ以外の武器はほとんど持つて行く
らしく」

「嘘？　俺のミーリは大丈夫か？」

「いや、どうやらそれを中国に持つて行くらしい、他にも・・」

「じょっ・冗談だろ？　そしたら俺はどうやって戦えばいいんだよ？」

「製鉄所にあるR P Dを使つらじいで、あそこなら古い銃なら
そこらへんに転がつてるからな」

室蘭製鉄所には古い銃から改良し新しい武器を作る施設がある

高射砲も改良した武器の一つである

だから、中国やロシアから奪つた武器や古い銃などが置いてあるのだ。

モシン・ナガンもその中から見つけたのだ

「嘘だろ？あれこの前、暴発して散々な目にあつたじゃないか」

「大体、ここの前も俺のM-24（ライフル）を持って行つたくせに」

「日本以外で戦つてゐる軍隊さんは偉いからだそうだ」

納得もしないまま、中央の奴等は俺のミリタリヤ他の武器を持って行つた。

「兄ちゃん、俺のおいたリンゴどうなつた？」

食堂でカレーを食べながら勇一が聞いてきた。

「勇一、お前あの場にいなかつたのか？」

「うん、リンゴを置いたあと製鉄所で緊急招集がかかつて

そつちに行つてたの」

「まじか、じゃあリンゴはあのままか、やばいな後で取りに行かなきゃ」

「で？どうだつたの？」

すると、中谷が

「勇一、お前が今食つてるカレーは誰が買つたと思つてるんだ
しかも、竹中は、から揚げカレーにサラダ付きだぞ。」

「じゃあ、兄ちゃんが勝つたんだ」

「そうだぞ勇一、ここの俺に対しては、血も涙もない兄ちゃんに感謝

しな」

「うん、ありがと兄ちゃん。じゃ、これから仕事だから行くね
そつちで勇一は仕事場に行つてしまつた。

「なあ竹中、日本もどうかしてゐよな、勇一を

あんな危険な製鉄所で働くだなんてよ

まだ9歳だろ?」

「仕方ないよ、今は俺や勇一みたいな孤児は日本人として扱つてくれない時代なんだ」

俺と勇一は本当の兄弟ではない、ただ同じ場所で空襲にありその空襲で親を互いに失い そのショックで言葉を失った勇一が

俺が世話していく形で一緒に生きてきた勇一が

「これから、兄ちゃんって呼んでもいい?」と、

突然、失っていた言葉を取り戻し、俺を兄ちゃんと呼ぶようになつただけの関係だ。

「でもその時は、お前泣いただろ」

カレーを食いながら中谷がそう聞いてきた

こいつ、俺の心が読めるのか?

「当たり前だろ、感動したよ。1年間ぐらいい喋らなかつた勇一が突然喋つて

突然お兄ちゃんだぜ 感動するに決まつてるだろ」

「で?泣いたのか?恥ずかしがるなつて吐いてしまえ楽にならんぞ」

「『想像にお任せします』

すると、後ろから

「なんだよ、竹中つて恥ずかしがり屋だな」

こいつは、中谷と一緒に高射砲を操る仲間の竜崎だ

「いいだろ恥ずかしがり屋でも、で?どうしたんだ」

「いや、座るところがなくてよ隣いいだろ?俺の彼女もいるけど?」

そう言いながら隣にまだOKもしてないのに座つて来た

「なんだ自慢をしに来たのか?いいよな彼女、俺も欲しいよなあ中谷?」

すると、中谷は何やら勝ち誇つたかのように

「悪いな竹中、俺も最近できたんだ」

「なにつ！－じゃあ彼女いないの俺だけ？」

隣に座っていた竜崎が

「でも竹中、お前、部下には結構慕われているだろ」「男にモテたつて意味ないんだよ竜崎」

すると、彼女が

「今度、誰か紹介しましょうか？」

だが、中谷が

「紹介しない方がいいですよ　こいつすごい上がり症で緊張すると倒れちまいますから」

「変なこと言つなよ、中谷

「こんなことより、竜崎、俺たちに何の用だよ。そこの彼女

室蘭の情報司令部に所属してる人だろ」

「ちえつ『冗談の通じない奴だぜ　まあ彼女なのは本当だけどな

彼女からもらつた情報なんだが

人間爆弾つて知つてるか？最近シベリアでは、その被害が出てる

んだ

「いま、ロシア人の数人かが、装備しているらしい」

中谷が落としたスプーンを拾いながら

「なんだその気味の悪い話は？」

「スペイの情報によるとはじめは、

犬につけて走らす予定だつたらしいが

犬が、弾が飛び交う中、怯えて自軍に戻つたりして大変だつたら

しい

だから、人間につけて走らすのぞ。いわゆる昔の日本がやつていた
玉碎つてやつだ」

つたくよくこんな気味の悪い話をしながら食事ができるもんだ。
俺と中谷は完全に食欲が無くなりスプーンが止まる中

竜崎とその彼女はラーメンを食べ続けていた。

似た者同士、くつつくと詰つがまにそれだ。

まだ、竜崎の話は続き

「実際は人間爆弾を付けているやつは重罪人か
相手に知られたらまずい情報を持つてる奴が情報漏洩を
防ぐために付けてるらしい 別に任意で付けてる奴もいるらしい
がな

まあ、それほど奴等も必死なんだろう 詳しい造りのことは分か
らないが

手榴弾と同じ原理だらう安全ピンを抜いて衝撃をあたえてドカン
だ」

しかし疑問が残る

「なんで、こんな田舎町でそんな情報がわかるだよ」

「それは、彼女は中央に知り合いがいてなそいつが情報司令部の結
構上においてな

それでここにもそんな話がくるのよ

「なるほど」

そう言いながら残りのカレーを頑張つて、一気に口に流し込んだ。

「さて、本題はこれからだ、中谷と竹中よ
東京に行く気はないか？東京中央一部訓練学校にあの有名な

教官が戻つてくるらしい」

「誰それ？」

「いや、俺も詳しいことは分からぬが、異名は、怒ると怖い瘤瘡玉
だが、実績は凄く一つの部隊で町に駐在していた軍隊を壊滅させ
たらしい。

教官としては、よくわからないが、あまりにも厳しそぎて自殺者
が出たつて噂もある

でも、そこを卒業した奴はある分野においては最強になるつて聞

いたぜ

ある分野とは近距離戦闘か遠距離戦闘かのどちらかのことだと思
うし

中谷はいいらの連中で敵ひやつはいなし、竹中は遠距離に關し
てはすでに最強だ

だからそこで訓練を受ければお前ら最強になるべ。しかもだな・・

「

警報がなった。

「第一級警備配置につけ 遂に来たぞ中国だ
死ぬ氣で守れよ」

無線ではそんな内容が飛び交っていた。

俺達は急いで自分達の死ぬ場所に急いだ

高台に着き俺は自分の持ち場に着いて
ある事に気づいた、

「おこ、中谷どうしよう俺の所にまだ R P D が届いてない
ミーミーが今はもうない、なら俺はその場で戦えない

高射砲を竜崎と動かしながら中谷は

「製鉄所に取りに行け、きっとあるはずだ。しばらくは海軍がどう
にかしてくれるはずだ」

「わかった。お前ら俺が着くまで死ぬんじゃないぞ」

そつ言い残し俺は製鉄所に急いだ

あともう少しで製鉄所だ・・

なんだ今の衝撃は?

空を見上げると戦闘機が旋回していた。

くそつ海軍は持ちこたえれなかつたのか、急がないと
このままでは上陸される

なんで、反撃をしないんだ。航空隊は何をしてくる。
しまつた。見つかつた

当たり前だが、町中を堂々と走つてゐる俺が
見つからないわけがない

敵機が撃つてきた。後ろからどんどん迫つてくる音がする
俺はその場に倒れこんでしまつた

ヤバい死ぬ・・・

敵機が追い抜かして行つた。

助かつた、弾は当たつてない。

急いで製鉄所に行かなくては・・・

俺はどうやら少しの間、氣を失つていたらしい

目の前で製鉄所や学校が燃えていた。

すでに戦闘が終わつていたのだ

海岸沿いには、中国の船が一隻泊まつていた。
とりあえず高射砲の所に行こう

高射砲はほぼ無傷だつた。

中谷は何かをしていた。

あいつ、何をやつてやがる

「おい、何してやがる 早く撃てよ」

「竹中、生きてたのか？手伝つてくれ、ジャム（根詰つ）つた

「わかつた、今行く」

そこに行くと

操縦席に座つてゐる竜崎がいた

「竜崎、何してお前も手伝え」

しかしながら反応しない、

「まさか・・」

「竹中、竜崎を席から降ろすの手伝ってくれ」

竜崎は死んでいた。そして、高射砲が動かない理由はジャムではなかつた

竜崎の遺体の一部が高射砲に引っ掛けっていたのだ。

「中谷よくお前は無事だつたな」

無事と言う訳でもなかつた。服に血がにじみ出でていた。

「まあな、戦艦の一隻ぐらい落とさないと死ねないよ」

二人係でようやく竜崎を下し終わつた。

その時、海岸で銃声が鳴つた。

「なんだ？おい、中谷、双眼鏡貸してくれ」

双眼鏡で見ると

この戦いで生き残りの人たちが一か所に集められ
そして敵に一人一人殺されていた。

何とかしないとそう思つた時、俺は鳥肌がたつた。
一つに集められた場所に勇一がいた。

そして、敵は勇一に銃口を向け引き金を引いた。

「止めろー」遅かった。勇一は倒れた。

「あの野郎！」

俺は自分の持ち場にあるモシン・ナガンを取りに行つた。

「竹中、止せ 気持はわかるがここからは届かん

3,000mは離れてる」

「だったら、俺の記録を塗り替えてやる」

「それに、あそこには五人敵がいる一人を倒せても

残りの四人はどうする モシン・ナガンは連発はできないぞ

しかも、ボトルアクションだから標準がいやでもずれる、どうする気だ」

そんなことは、考えてもなかつた

敵に標準をあわせ引き金を引いた

一人また一人

敵がこっちに気づいたけど遅い、あと一人

五人倒し終わつた。

一か所に集まつていた人たちが一斉に逃げだした

「よし中谷、戦艦を落とすぞ！！」

中谷は、双眼鏡で覗きながら

「竹中、お前つてやつぱりすごいな・・・」

「いいから、早くしろ弾は俺が入れてやるから、お前は戦艦を落とせ」

「わかった。戦艦を落とせば俺もすごい奴の仲間入りだ」

そう言つと中谷は操縦席に座つた。

一隻に向かつて集中的に撃ちまくつた。

「なあ、竹中これ終わつたら一緒に東京に行くべ

一緒に癪癩玉とやらの訓練を受けようぜ

俺は得意のナイフとハンドガンで中・近距離　お前はライフルで遠距離

それで一緒にバディを組むべ

竜崎もきつと喜ぶさ　だからあんな話をしてきたんだよ」

「そうだな、お前となら一緒に行つてもいいぞ　そうするか？」

「おう約束だからな、じゃあさつやとこれ終わらすぞ

弾が切れだぞ　竹中まだか？」

「ここにあるやつは全部使つちまつた、待つてろ、取りに行つて来る」

取りに向かつたその時、高射砲が爆発した。

いや、正確には戦艦から攻撃された。

「中谷！――」

高射砲があつた場所には鉄くず以外何も残つていなかつた。

その後、札幌からの援軍によりこの戦闘は終結した。室蘭港防衛隊は、壊滅し生き残った俺達は別の部隊へ配属されることが決まった。

だが、俺はそれを断り竜崎の彼女のもとへ向かつた。

「頼む、東京への行き方を教えてくれ」

「中央二部訓練学校に行くの？」

「ああ、あいつと約束したからな 一緒にいくつて」

「お願いだから行かないで、政府はいま北海道を放棄する事を検討中なの

日本はいつか負ける 政府は負けた後の国際への復帰方法まで話し合っているのよ

それなのにまた軍隊に入るだなんて 自殺行為よ
もうこれ以上まわりの人たちが死ぬのは嫌!! それなのに行きたい?」

俺は黙つてうなずいた。

「どうしてここにいる人たちはこうなの? 竜崎君もそう
北海道が放棄されるって教えるても何にも動じないで逆にあなた達に
訓練学校の話までするし私には考えられない 死ぬのが怖くない
の?」

「それはない、誰だつて怖いさ だけど何もしないで死ぬのはもつ
と嫌だ。

これは誰かの言つた言葉なんだけど

死ぬのが遅いか早いかなんて関係ない、問題はどう生きたかだ
竜崎だつて後悔はしたと思うよ、だけど後先考えずに生きるつて
ことも

今の時代には必要なんぢゃないかな?」

彼女はそれを聞いて諦めたのか

「しばらくしたらここにヘリが来るわ それに乗るといいわ
兵隊さんに言つのも変だけど 死なないでね 戰争が終わつたら
いい女の子紹介してあげるから」

そつ言つてどこかに行つてしまつた。

しばらくすると、海岸沿いにヘリが1機着陸した
そこに行くと

「お名前を確認しますのでお名前と年齢をお願いします」

「竹中 隼人 17歳です」

「ようこそ、第十七訓練部隊はあなたを歓迎します。
あなたが入隊する訓練部隊は第十八になります。つまり、私たちと
入れ替えて入ることになりますのでこれから1年間、頑張つてく
ださい」

ヘリに乗り込もうとすると

「後ろの方は誰ですか？」

振り向くとそこには、彼女がいた

だが、一瞬、いや俺の幻覚だと思つが横に中谷と竜崎、勇一が見えた

まったく、俺の頭もおかしくなんともんだ、そう思いながら

「ありがとう、行ってくる！！」

そつ言つて俺は勢いよくヘリに乗り込んだ。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
竹中を主人公にしてまた書いてしました。
多分、この調子でまた書くかもしないので
その時はよろしくお願ひします。
また、意見や要望がございましたら
ぜひとも書いてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0694d/>

第十八訓練生 零

2010年10月28日05時44分発行